東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第３回　三浦忠士さん（後編）

事例５：間借りした学校で

震災の大きな被害の中で、被災地のこどもたちは住み慣れた住環境も奪われたんですが、長年通っていた学校の校舎も奪われたんですね。ということはそこに通っていた友達との関係性も奪われるということなんです。例えば宮城野区の中野小学校のこどもたちは、近隣の中野栄小学校に間借りをしてそこに通うことになりました。家が離れているので、朝はスクールバスで迎えに来てもらって、学校に届けられて、帰りはそのバスに乗って帰るかたちになります。そうなると学校がおわった後の友達と一緒にあそぶ時間が奪われるんです。離れ離れの状態で、それぞれ仮設住宅や避難所、新しく移転したおうちで過ごすことになってしまう。これを受けて、僕たちは中野栄小学校の校庭でもあそび場を始めました。バスが迎えに来るまでの時間なのですが、短い貴重な時間を思いっきり自分のやりたいことをさせてあげようじゃないかということで、ここは学校の先生の許可もあり火も使えるようになりました。他のあそび場でも使えるところもありましたが、許されないところもあって。ある程度自由度の低いところも多くありましたが、ここに関しては許可をいただいて、木を燃やしたり、べっこう飴をつくったり、いろいろやっていました。中野小学校は、となりの学区で大きな被災を免れた中野栄小学校の中に間借りしていました。ということは、下校の時間に中野小のこどもたちのほかに、中野栄小のこどもたちもここであそんでいるわけです。だけど突然移転してきたこどもたちだから、すぐに打ち解けられないということもあって、距離をとってあそんでいたりして。でもまぁ第三者の僕たちがいかにも楽しげなあそび場を開くわけです。するとこどもたちは我慢できなくなってお互い集まって来る。なかなか一緒にあそべない、時間が奪われたり突然同じ場所で学校に通わなければいけなくなったりして、関係性がうまく築けずにいたこどもたちを、あそびの中でつなぐというような取り組みでした。その中で先生たちに、こどもたちが元気になったという言葉をいただいたんです。ぼくたちはあそび場を開催した時の顔しか見ていないので、あぁ楽しそうにやっているなとしか思わないんだけど、より濃密に自分らしくのびのびあそべるという環境を作ることで、やる前と後だと笑顔の質、というとおかしいと思いますが、ギラギラした感じですかね。間借りしている小学校で気を遣ってあそんでいた状況と比べると、気を遣わない、隣の小学校のこどもたちと友達になってあそんだほうが、当然自分らしくあそべますよね。なかなか関係性がつくれなかったこどもたち同士の壁を、あそびの力を介して取り払ったのと、短いけれど友達と一緒にのびのびあそべる環境を作ったということが、いまお伝えしたような成果を生み出したのかなと思います。いろんなめぐりあわせで、このあそび場が終息したあとに、このあそび場にきていたこどもの親御さんに出会う機会があったんです。その方からも、あそび場であそんだ後は元気に帰ってきた、木っ端で椅子をつくったり剣をつくったりして持ち帰ってくるんですけど、その日はすごく元気そうだったというお話を伺っているので、その子に関してはいい時間をつくれたかなと思っています。

**冒険広場のこと**

震災が発生してからの私たち動きとその中で感じたことはこれくらいにして。海岸公園冒険広場も津波で被災して2018年までお休みしていましたが、再開してからのお話をしたいと思います。

再開したのは、2018年度の夏。かつては周辺にこどもたちが住める場所があって、自分の足で来れる公園でもあったんですが、今は近隣は災害危険区域になって住めない場所がほとんどになってしまって。残念ながらあそびに来るこどものほとんどは、大人の気が向いたときにだけ連れきてもらうようになっています。そうなると顕著なのは、継続したあそびが見られないということです。小屋を作る、田んぼを作るこどもも震災前にはいました。自分で耕して、水張って稲を植えて、そういう子もいたんですけど、そんなあそびもちょっと難しくなったかな。周辺の環境を生かしたあそび、釣ってきた魚を焼いて食べるとか、つかまえてきたカエルを公園で飼うだとか、そういうことをなかなかしづらくなったのがオープンして直後の状況でしたね。でも最近はそうでもなくなってきた部分が実はあって、通うなかで、さっきの楽農村で起こったような作用がここでも起こったのかなと思っています。大人があそびに目覚めて、こどももあそびやすくなるような作用が。ちょっとずつ、いろいろうるさいこと言われない公園であるということが大人たちにも伝わってきたようで、ざっくばらんにいろいろ相談してくれるようになったんです。虫あみ忘れたから貸してくれないか、とか、この近くで釣りしたいんだけどどこかないか、とか。僕らがちょこちょこ案内するなかで、この辺りの外でもどうあそべるかということが少しずつ伝わってきて、こどもを連れて大人が釣りにいく、カニを採りにいくみたいなことが生まれてきたんです。周辺の自然環境を活かしたあそびみたいなことを楽しむ親子の数が増えてきているかなぁと。僕たちは、それをさらに加速させようということで、公園の近隣の地域でもいろいろな活動をしています。例えば、イナゴをとりにいこう、とか。仙台平野って田園地帯で田んぼが広がっているんですけど、稲を刈った直後は稲もなくてイナゴが見やすくてつかまえやすいし。食べるところも含めてお伝えするようなイベントをちょいちょい開催して。近隣のせんだい3.11メモリアル交流館など地域のほかの施設とも連携して様々な試みをしていて。例えば、メモリアル交流館近くのたんぼや水路を歩いて、ザリガニやイナゴ、いろんな生きものを捕まえて、ずばり食べる、という。当然その捕まえる過程であそびもうまれていくんですけど、そういうものを親子で楽しみながら、その自然環境をね。のびのびできることがたくさんあるという意味で、ものすごくあそび環境として優れているということを、あまり難しい理屈なしに、実際にあそぶなかで感じてもらうということは随時やっています。そんなことをやることで、こどもの足であそびに来れないあそび場、というマイナス部分をなんとか補っていきたいなと思っています。つまりキーワードは、大人のあそび心を引き出すということなのかなと思っています。それとともに、地元の方にもさまざまなご協力をいただいています。

**地元の方と一緒に**

冒険広場があるのは井土地区というところなのですが、災害危険区域になって住めなくなったところがある一方、今も住めるところもあります。そこに元々お住まいだった方にご協力いただきながら、こどもの頃にどんなあそびをしたかを調査して、その成果を紹介するあそび場も開催しています。「東六郷であそぼう」いうタイトルなのですが、例えば周辺に竹がもともと生えていて、それを使って昔のこどもたちは鍋も作るし釣り竿も食器も、いろんなものを作っていたわけです。竹をくりぬいて食材を入れて煮炊きしたり、獲ったものを食べたり、いろいろやっていたわけです。それをお伝えするイベントを地元の方と一緒にやる中で、昔のこどものあそびとか、そこにあった自然環境のよさを親子に伝えていくという活動もしています。

**あそび場のこれから**

これまで、元々沿岸部で暮らしていたこどもたちが震災で様々な我慢をしてきたというお話はしましたが、災害が起こらなくても別のかたちで我慢をしているこどもたちは無数にいるわけで、被災地の復興が進んだ今でも彼らが自分の足で通えるあそび場づくりを続けることの重要性を感じています。巡回型あそび場以外の活動が増えたことで、割ける人員や時間は減ってしまったのですが、そこはできるだけ今まで活動していた複数の地域に重なっている公園を選んだりして。数は減らしたけど今まで関わったこどもたちが通える場所を選びながら、活動を継続しています。例えば七郷中央公園冒険あそび場がそれにあたります。全体の数はずいぶん減っちゃったかなと思いますが、今お伝えしたような基準で、関わってきた親子が自分の足であそびに来られる場所を選んで、そこの巡回型あそび場は継続しています。大人を主な対象としたものづくりサロンは「縁側倶楽部」という名称でやっていますが、それも継続しています。震災の復興はある程度進んだといえるのかもしれませんが、来たいときに来て帰りたいときに帰れるあそび場づくりは、引き続き大切だろうなと思います。

**子育て支援施設、のびすく若林で**

さらに、私たちはのびすく若林という施設でも指定管理者として働いています。そこは乳幼児親子向けの子育て支援、親支援の施設で、主に未就学児を対象に、その親子があそびにくる室内施設です。基本的には館内での子育て支援、親支援なのですが、ぼくたちが関わるにあたって、お外のあそび環境としてのよさみたいなものは活かしたいなと考え、外あそびの機会をつくっています。のびすく若林は区役所の隣にあるのですが、その区役所の大きな庭のようなところを間借りして行っています。木が生い茂っている、若林区ふるさと広場という場所です。どちらかというとのびすくには、館内施設を選ぶ親子が来るわけです。なので、そこの親子にお外に出ただけでいろいろ自由だし、気を遣わなくてよくなるし、楽しいよ、とお伝えする活動を、今までお話してきたような経験を活かしながらやっています。そのなかで顕著なのは、保護者の変化ですよね。館内だけであそんでいると、元気のいい子は走っちゃダメだし壊しちゃダメ、ほかの子のものをとっちゃダメと、だめだめ尽くしなわけですよ。その中で笑顔がなくなってしまう親御さんもいますし、こどもに厳しくあたってしまうこともあります。手をあげる寸前のような方も見てきましたし。当然こどもはこどもでさらにダメと言われると、さらに親に叱られるようなことをしたりとか、逆にこどもなりに何かを感じておとなしくなっちゃったりとか。さらにおとなしくしているんだけどある時に怒りが爆発する姿を示すこどももいて。でもやっぱりお外になると、それがだいたいOKになるので。走ってもいいし、草引っこ抜いてもだれも文句は言わないし。こどもももちろん笑顔になるし、お母さんも笑顔になるし、親子の関係も非常によろしくなるしで。お外であそぶという選択肢がなかったんだけども、実は潜在的にはそこがベストマッチだったという親子もたくさんいて、お外の魅力みたいなものを紹介する役割は果たせているかなと思います。

それから、遊具がない公園であそべないって思っている親御さんってかなり多いのですが、そんなことないよということをお伝えする役割も担っています。ふるさと広場っていうのは遊具が無い場所なのですが、実際来てみてちょいちょいあそんでいると、親御さんが気付くわけです。ロックガーデンみたいなものがあって、岩がごろごろ並んでいるようなエリアがあるんだけど。そこをよじ登る時のこどもたちの笑顔。１、２歳の子たちなので、ちょっとした岩を登るのも一苦労で、降りるのも大変なわけです。ちょっと高い飛び石状になっている岩を、大人はひょいひょい渡っていくんだけど、こどもたちは、よいしょ、よいしょ、と。こどもは延々１時間あそべるっていうことに対するママたちの驚きと、その驚きのあとに訪れる喜びというのかな。しつらえられたあそび環境に慣れすぎていて、自分たちにあそびがつくり出せるとか、こどもたちにあそびをつくり出す力が満ちているということを知らない親御さんたちが多いんです。だけど、こどもたち自身は依然としてあそびをつくり出す力を失っていないから、環境さえ与えられると楽しいことは見つけて、あそぶわけです。そこをお伝えできているというところは、大きいかなと感じています。そういう部分のことをご存じない、あるいは、実は「私こどものときやってた」って親御さんたちもいたりするんだけど、様々な情報が氾濫する中で、見失ってしまっていたのかもしれない。そういうお母さんたちも少なからずいるなかで、別に遊具がなくてもあそべていたというのを思い出してもらったり気づいてもらったりするのは、非常に大きな仕事をさせてもらっているなぁと感じているところです。

**最後に**

災害を語るとき、レジリエンスという言葉がよく出ますけど、その力をこどもたちは持っている。ぼくたちはあそび＝自分たちが心からしたいこと、という風に理解しているんですけど、それがのびのび楽しめる環境さえあれば、こどもたちは災害がもたらすさまざまなつらさを乗り越えるしなやかさ発揮します。ただ、その環境を作り出すこと自体、大人の力がないとなかなかできない部分もあって、そこは僕たちが出てくると。環境もそうですし道具もそうですが、周囲の親御さんも含めた大人たちとの調整、関係性作り。変に教えるという形じゃなくて、お父さんたちの辛さ、お母さんたちの辛さ、いろいろあるので、そこもひとりひとりを受け止めながらその中で信頼を勝ち得て、なんとなーくこどもたちの自由なあそびを大目に見てみませんか～みたいな形でお伝えすることで、徐々に大人も含めた環境を、あそび環境をよりよいものにしていくと。そうなると、そこからはこどもが自ら持っているあそび心で自らを癒し、回復し、生きやすくしていく。そんなところを大事にして活動しています。

**◎宮城県の「認定NPO法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク」の三浦忠士さんにお話を伺って**

**酒井真由子**

三浦さんにお会いする前に、私たちは「海岸公園冒険広場」と地下鉄東西線の荒井駅にある「せんだい3.11メモリアル交流館」を見学しました。私は30年以上前に父の転勤により仙台市で暮らしていたので、今回「海岸公園冒険広場」周辺を車で回りながら地名を確認し、「せんだい3.11メモリアル交流館」に展示されている地図の文字を目で追いながら、自分が住んでいた地域や部活動大会の会場、当時通っていた塾の友達の学区などを探していました。そして、そこにあった写真と言葉に心が揺れ動きました。その余韻が残る中で、三浦忠士さんにお会いし貴重な話をお聞きすることができました。

三浦忠士さんは、「あそび」とは「自分たちが心からしたいこと」だと言います。そして、「子どもがやりたいことを実現するには、大人が環境を整える必要がある」と考え、宮城県内を「あそび道具をたくさん積んでいるプレーカーと呼ばれる車」で巡回し、あそび場である「冒険遊び場」を創っています。

三浦さんら「冒険あそび場ネット」の方々は、震災後の子どもが置かれている状況を見て考え、そこから子どもが自分らしさを出せないことを理解し、その状況を変えようと動きました。三浦さんらは、遊び道具を積んだ車で子どもが暮らしているところへ行き、子どもが大人に気を使うことなくやりたいことを存分にできるように環境を整えました。三浦さんらが子どもに対して否定せずにいると、子どもが自分らしく生きることができ「ギラギラ」してくる。するとそこに、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんなど大人たちも集まって、巻き込まれていく。三浦さんの話を聞きながら、宮城県内のあちらこちらに「ギラギラ」しながら遊ぶ子どもと大人の渦が出来ているのでは…と遊びの渦があちこちに点在している様子を想像していました。

三浦さんは「あそび場」を創るにあたり、「子どもが自分の足で行ける場所、自分の気が向いた時に行ける場所」にこだわりをもっていました。子どもが自分の足で行ける範囲、つまり「距離」が重要な要素となります。そして、「あそび場」で自分がしたいことをいくらでもできるという自由さも重要なのだと、三浦さんの話を聞いていて思いました。三浦さんたちは、子どもが「やってみたい！」を自分で実現するために、あそび素材（道具・工具・材料など）を自由に使うことができることを、とても大切にしているからです。私は、三浦さんたちは子どもの自由のための「場所」を創っているのかなと思いました。いや、そこは、子どもだけでなく、大人にとっても自由のための「場所」なのだと思います。

宮城県に限らず、今の日本社会には、以前に比べると、子どもが自分の気が向いた時に自分の足で行くことができる「場所」、そこに行けば誰かがいて、自分が来たことを歓迎してくれる「場所」が減りつつ（奪われつつ）あります。三浦さんたちは、震災後という状況において、みんなが自由に行けて、自由に遊べる「冒険あそび場」を創っているのです。

子どもや大人と関わりながら「冒険あそび場」を創ってきた経験に基づく三浦さんの「外あそび」と「あそびの力」の話は、「冒険あそび場」理論と呼びたくなるくらい説得力がありました。それは、三浦さんらが「冒険あそび場」を開拓し、子どもや大人と関わると同時に、子どもの様子をとても丁寧に見て取っているからだと思われます。子どもの育ちを支えるすべての大人が、「外あそび」と「あそびの力」について、もっともっと理解を深めていく必要があるでしょう。そして、日本中に、子ども自身が行きたいと思ったときに、自分の足で行ける場所と道ができたらいいな、と思います。

聞き手　小林成親

まとめ　酒井真由子

編集　清水冬音